

K-530

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第34集

上新田

上新田A遺跡発掘調査報告書

第1集

平成4年3月

1992

米沢市教育委員会

上新田

上新田A遺跡発掘調査報告書

第1集

平成4年3月

1992

米沢市教育委員会

序 文

本遺跡が所在する上郷地区は戸塚山古墳群を始め、原始より数多くの遺跡が分布している地域として県内外から注目されております。

また、これらの遺跡群を保存、活用する目的で地元では保存会も結成されており、現在、当市において結成された、窪田地区的賣領塚古墳保存会、上長井地区的上長井史上長井史跡保存会がありますが、上郷地区史跡保存会はその先駆者といえます。

今回の発掘調査は、文化庁並びに山形県教育庁文化課の指導のもと、個人の圃場整備に伴う緊急発掘調査として本市教育委員会が実施し、本書はその成果をまとめたものです。調査区からは縄文時代、古墳時代後期、奈良、平安時代の遺物や遺構が確認されましたが、中心は古墳時代後期の集落跡であります。

米沢市では始めてこの時期の集落跡が確認されました。年代でいいますと7世紀後半期に位置します。現在195基が存在する戸塚山古墳群の主要古墳に関連するものとして注目されます。

また、調査地点は7世紀後半期あたりまで、単独の台地であったことも判明しました。低湿地帯となっていた箇所からは多数の完形の土師器が出土しました。

これらの資料は本市でも少ない資料だけに、大変貴重な成果といえましょう。・

今後も、戸塚山古墳群を含めた古墳時代の全容解明に向け、尽力してまいる所存ですので、関係各位の一層のお力添えをお願い申し上げます。

最後になりましたが、本調査にあたり、格別の御指導を賜りました、元東洋大学教授の玉口時雄、文化庁、山形県教育庁文化課、さらに多大なるご協力を賜りました手塚 隆、手塚二男、手塚幸夫、加藤里実、鶴丸北、鹿俣 実、上郷地区史跡保存会、上郷公民館に対し、心からお礼申し上げます。

平成4年3月30日

米沢市教育委員会

教育長 小口豆

例　　言

1. 本報告書は、文化庁の国庫補助を受けて平成3年度に実施した上新田A遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は米沢市教育委員会が主体となって平成3年8月1日から同年9月30日の期間で実施した。目的は個人の圃場整備に伴う緊急発掘調査である。
3. 調査体制は下記の通りである。

調査総括 小関　薰（文化課長）
調査担当 手塚　孝（文化課文化財係主任）
調査主任 菊地政信（文化課文化財係主任）
調査補助員 鈴木由美子
作業員 原三郎、松本三郎、安部ふみ子、黒田博和、黒田よし子、遠藤忠一、
小浦文吉、沢根英夫、加藤三郎、鷗貫六助、須藤省三、石川勇太郎、
鈴木小二郎、佐藤峯男、安部廣一、大地厚、北村泰男、遠藤昭一、
星努、小関晴雄、皆川清助
調査協力 手塚隆、手塚二男、手塚幸夫、株丸北鹿保実、上郷地区史跡保存会
(会長 星宗男)、上郷公民館（敬称略）

調査指導 玉口時雄（元東洋大学教授）、文化庁、山形県教育庁文化課
事務局 木村琢美（文化課課長補佐）
小林伸一（文化課文化財係長）
平間洋子（文化課文化財係主査）
山田　　隆（文化課文化財係主任）

4. 採図の縮尺は各図面にスケールで示した。
5. 本書の作成は菊地政信が担当し、鈴木由美子が補佐した。全体的に手塚孝が総括した。責任校正は小林伸一がその責務にあたった。

本文目次

(表紙題字は 米沢市教育委員会教育長 小口亘による)

序文
例言
目次

1. 遺跡の概要	1
2. 調査の経過	1
3. 検出された遺構	5
H Y 2	5
H Y 55	7
H Y 6	9
H Y 7	9
H Y 8	11
H Y 9	11
ピット群	11
土壙群	13
奈良・平安時代の遺構	15
近世の遺構	15
自然遺構	15
4. 検出された遺物	19
縄文時代の遺物	19
古墳時代後期の遺物	19
土製品	23
5. まとめ	25
参考文献	26

挿 図 目 次

第1図 上新田A遺跡周辺の主要分布図	2
第2図 上新田A遺跡位置図	3
第3図 上新田A遺跡グリット配図	4
第4図 上新田A遺跡HY2、HY3、HY55平面図(1)	6
第5図 上新田A遺跡HY6、HY8平面図(2)	8
第6図 上新田A遺跡HY9平面図(3)	10
第7図 上新田A遺跡HY7平面図(4)	12
第8図 上新田A遺跡土壤平面図(1)	14
第9図 上新田A遺跡土壤平面図(2)	16
第10図 上新田A遺跡土壤平面図・土器・須恵器拓影図(3)	20
第11図 上新田A遺跡出土土器実測図	22
第12図 上新田A遺跡出土石器・石製品・土製品・刀子実測図	24

図 版 目 次

第一図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(1)	
第二図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(2)	
第三図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(3)	
第四図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(4)	
第五図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(5)	
第六図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(6)	
第七図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(7)	
第八図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(8)	
第九図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(9)	
第十図版 上新田A遺跡第1次調査の発掘(10)	
第十一図版 上新田A遺跡第1次調査出土の土器(1)	
第十二図版 上新田A遺跡第1次調査出土の土器(2)	
第十三図版 上新田A遺跡第1次調査出土の土器(3)	
第十四図版 上新田A遺跡第1次調査出土の遺物	



▲ 遺跡遠景（上空より撮影）



▲ 調査区全景（上空より撮影）

1. 遺跡の概要

本遺跡は米沢市街地の北東約2.3kmに位置する。発掘地点は米沢市大字上新田字檜台1.063番地他である。遺跡の東方には第1図で示す様に標高356mの戸塚山があり、その山頂及び北側を除く山麓には195基の古墳群が現存、この戸塚山をとりまく様に数多くの遺跡が分布している。

本遺跡が分布する地域は西方を北流する松川（最上川）の自然堤防にあたり、周辺は谷底平野にかこまれた独立した台地の様相を呈す。

そのため周辺は水田であり、比高差は東側で約1.5m、西方にゆるやかに傾斜しているため、西方での比高差は約30cm位と低くなっている。

台地は現在、畑として利用されており、これらの土地利用によって削平された土砂が台地東側を北流する小川に落下し、この小川から土師器片が多数表採されている。

遺跡の発見は米沢市教育委員会が昭和57年から同60年にかけて分布調査を実施した際に発見されたもので、採集遺物から本遺跡は奈良時代の遺跡として登録されている。

第1図で示した主要遺跡は発掘調査及び測量調査で実施した遺跡群である。これらの遺跡はいずれも古墳時代から奈良時代に位置する遺跡群であり、戸塚山古墳群ときわめて関連性が深い遺跡群である。この様な地域に位置する本遺跡も、他の遺跡群と同様に戸塚山古墳群との関連性が高い遺跡のひとつとして以前から注目されてきた。

2. 調査の経過

今回の発掘調査は個人の圃場整備に伴う緊急発掘調査として、平成3年（1991）8月1日より同年9月30日の期間で実施した。調査面積は約1,800m²であり、調査区全域に第3図で示す様に真北方向を基準として8m×8mのグリッドを設置して調査を開始した。

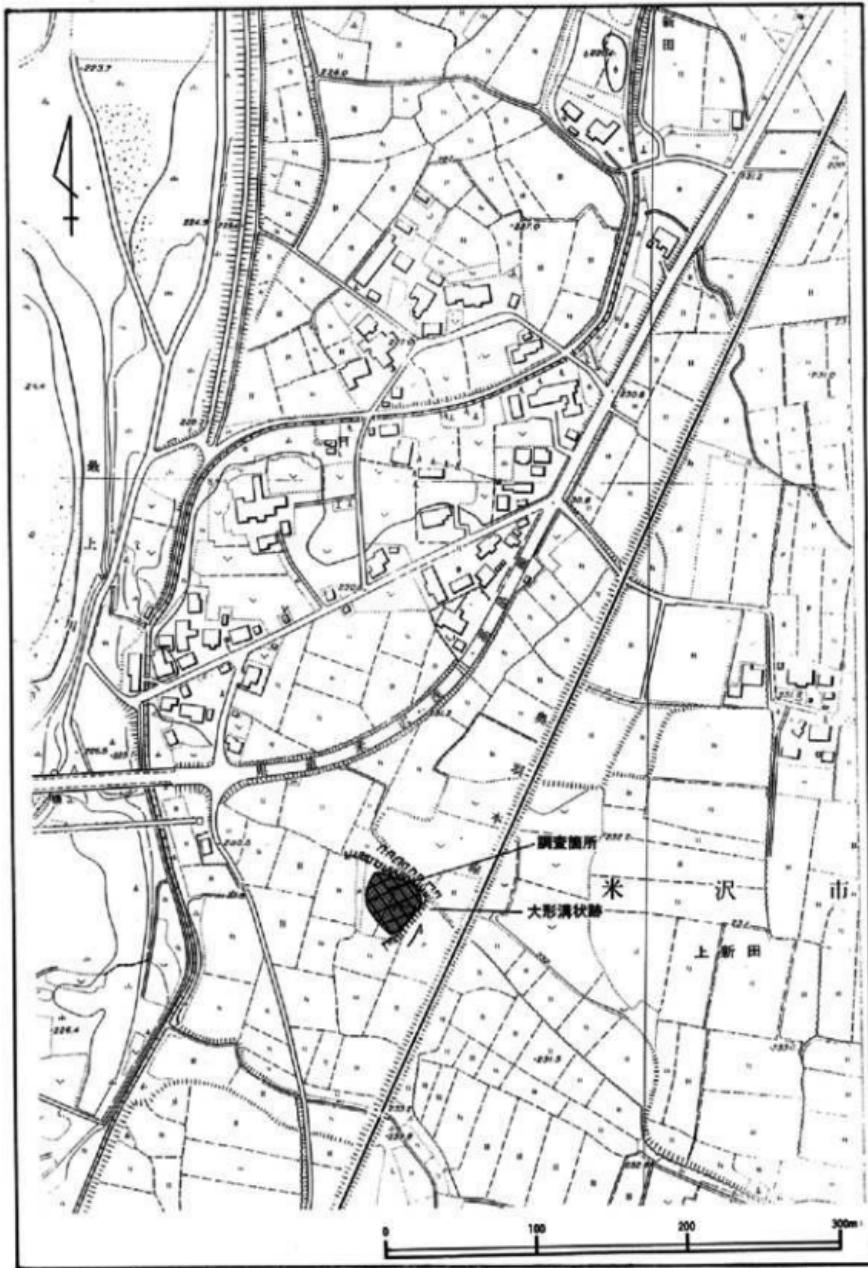
表土剥離は重機を用いて慎重に進め、8月1日から8月3日までの期間を要し終了、面整理と精査を並行して進めた。その結果、住居跡や土壤のプランが西方及び北方を中心に確認され、重複する遺構が多い様相であった。プラン確認の写真撮影をおこない、その後は住居跡から掘り下げを開始した。土質はシルト質で掘りやすい台地であった。8月13日から8月18日の期間は盆休みのため発掘調査は休止とし、8月19日から再開した。

9月に入り、住居跡の掘り下げを中心とした調査を進めた。その結果、HY2、3の下にもう1棟住居跡があることが判明する。さらに当初奈良時代と考えていた遺跡の年代が、出土遺物からそれよりさかのぼることが明らかになってきた。遺物が多量に表採される低地や斜面についてもT1からT5を付図で示した場所に配し掘り下げた。これらのトレーニングにより、台地の直下に大形の溝状遺構の存在が明らかになった。覆土には多量の遺物を含む特徴を有する。

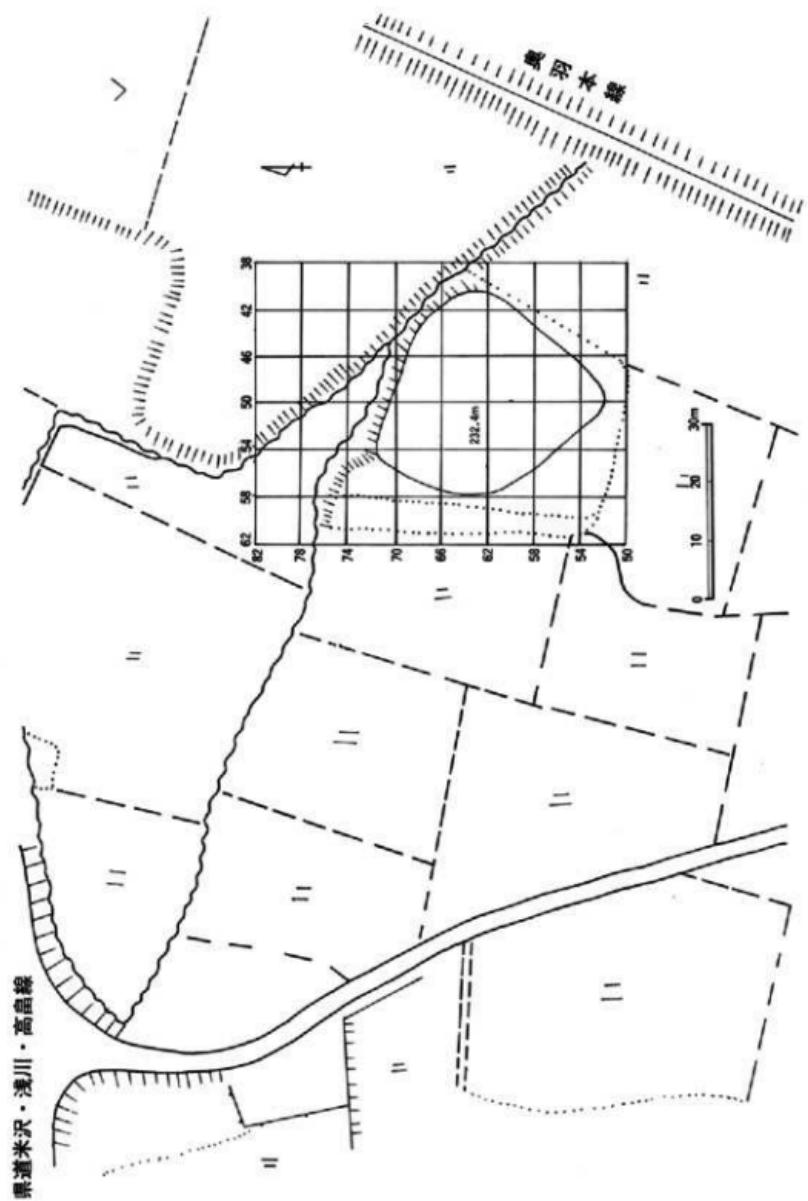
9月の11日に現地説明会、9月17日に上空より全景写真撮影をおこない9月20日まで掘り方を終了、9月21日から9月30日まで平板測量をおこない終了する。



第1図 上新田A遺跡周辺の主要遺跡分布図



第2図 上新田A遺跡位置図



第3図 上新田 A 遠跡グリット配図

3. 検出された遺構

今回の調査区からは、台地の全域に亘って検出され、住居跡7棟、溝状遺構16基、ピット63基と土壙59基がある。これらの遺構群大半は古墳時代後期（栗廻式）に併行する。他に縄文時代、奈良時代、平安時代、近世の各時期に位置する遺構群も若干認められた。縄文時代、古墳時代後期、奈良・平安時代、近世の各時期の遺構群について、以下に述べる。

・縄文時代の遺構

溝状遺構13基がある。遺構番号で言えば、K Y 31、34、44、47～49、53、54、60、61、63、さらに、145、146の遺構群である。これらは調査区の南方部に集中し、南北に並んで構築されている分布状況を呈する。平面形状が長形状を呈するもので、Tピットと呼ばれる遺構である。細長く幅が狭いのが特徴で、深さは約1mを有する。覆土は自然堆積で、内部から遺物は検出されなかった。この遺構は落とし穴及び、トイレの2つの説があるが、今回検出されたTピットは前者の落とし穴としての機能を有すると思われる。出土遺物から縄文時代中期に位置する。

当市において、Tピットが検出された遺跡は大清水遺跡、塔之原遺跡がある。両者とも複合遺跡であるが、Tピットは縄文時代中期に位置する遺構であった。

大清水遺跡は別名、桑山遺跡群No 3遺跡と呼ばれ、昭和55年に集落全体を発掘した例として知られる。Tピットは2基検出され、断面が袋状及び豊穴状を呈する。袋状を呈するTピットは集落の南端に位置し、覆土に遺物は含まれない。後者の掘り方を有すTピットは、集落を構成する豊穴住居跡の近くに構築され、覆土に多量の土器を含む。

塔之原遺跡からは、11基のTピットが検出されている。縄文時代前期の豊穴住居跡を切って構築したTピットも認められる。本遺跡の場合も住居跡の周辺に配置したグループと住居跡から離れた場所に構築したグループに分けられる。断面形態は袋状を呈し、深さは平均1m50cmを有する。覆土に遺物を含まず、自然堆積状況を呈する。

Tピットは構築される場所によって、それぞれ目的が相異すると推測される。上新田A遺跡の場合は住居跡から離れたTピットと言える。前述した様に本遺跡のTピットを落とし穴としたのは上記事項による。今回の調査区の近くに縄文時代の集落が存在していたことがうかがえる。

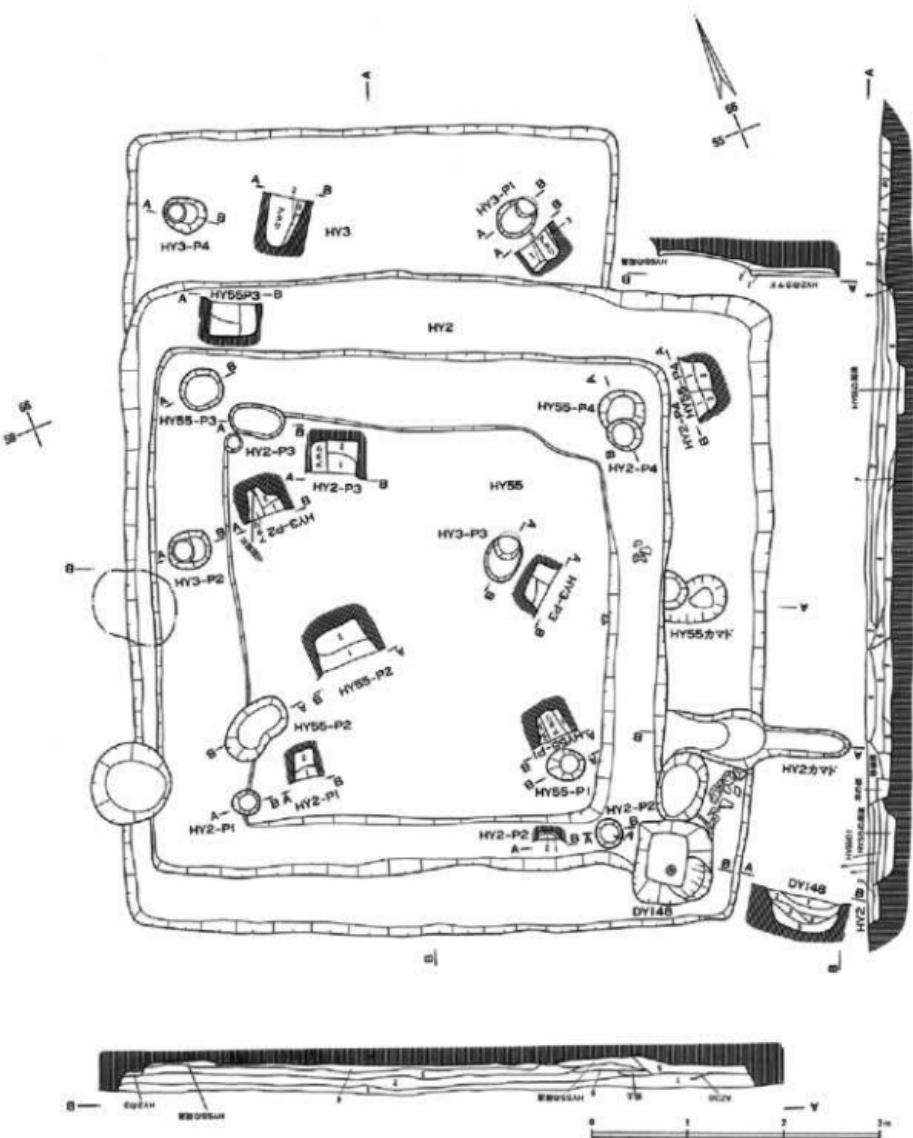
・古墳時代後期の遺構

豊穴住居跡7棟、溝状遺構4基、土壙46基、ピット53基がある。これらの遺構群について、列記した順に説明を加えたい。

豊穴住居跡（H Y 2、3、6～9、55）

H Y 2（第4図、第三図版）

平面形状一ほぼ正方形をなし、長径4m35cm、短径3m84cmを測る。主軸方向は北方を有し、H Y 3、55を切って構築したものである。



第4図 上新田A遺跡HY2-HY3・HY55平面図 (1)

H Y 2 に伴う土壙としては南西方向コーナー部に構築された土壙、1基がある。平面形状が方形を呈し、深さは38cmを測る。底面より、第11図2に示した完形の壺形土器が1点出土している。

H Y 8 にも同様な場所に土壙が構築されている。詳細については H Y 8 で述べる。

柱穴—H Y 2 、P 1～H Y 2 、P 4 と示した柱穴であり、30cm～50cm、深さは、12cm～45cmの円形に掘り込んでいる。柱痕跡の間隔は、P 1～P 2 は、3m 85cm、P 2～P 4 は、4m 15cm、P 4～P 3 は、3m 85cm、P 3～1 は、3m 95cm を有する。

壁—床面から60度の角度を持って立ち上がる。深さは床まで北で20cm、南で25cm、西で25cm、東で20cmと平均的である。

床—北から南へ若干傾斜をしているが、ほぼ平端で固い。

炉跡—南西部方向に煙道を持つカマドが確認されたが、後世の削平により原形を失っている。焚口は、幅55cm、長径60cm、煙道は85cmと推測される。今回の住居跡群では、H Y 2 だけにカマドが確認された。

遺物—カマド付近を中心に壺形土器が9点、小形鉢形土器3点、内黒壺形土器8点、壺形土器7点、瓶3点、高坏7点、高坏脚部2点、その他に壺形土器胴部片1148点、壺形土器口縁部片が271点、壺形土器底部片134点、内黒壺形土器片41点、内黒壺形土器口縁部片111点となり、他の住居跡と比較すると、最も遺物出土量が多い。総計1744点であり、底部片から考慮すると、約100点の壺形土器、同数の壺形土器の個体数が推測される。

H Y 3 (第4図、第三図版)

H Y 2 によって、3分の2がH Y 2 と重複している。平面形状は、柱穴の位置から推測するとほぼ正方形を呈する。東西5m 08cm、南北が、約5mの規模を有する竪穴住居跡と思われる。

柱穴—H Y 3 P 1～H Y 3 P 4 の4本で、35cm～45cm、深さは30cm～50cmの梢円形状の掘り方である。柱痕跡が4本とも確認された。

壁—北側及び東西の一部が現存する。深さは12cmと浅い。床面からの立ち上がりはゆるやかである。

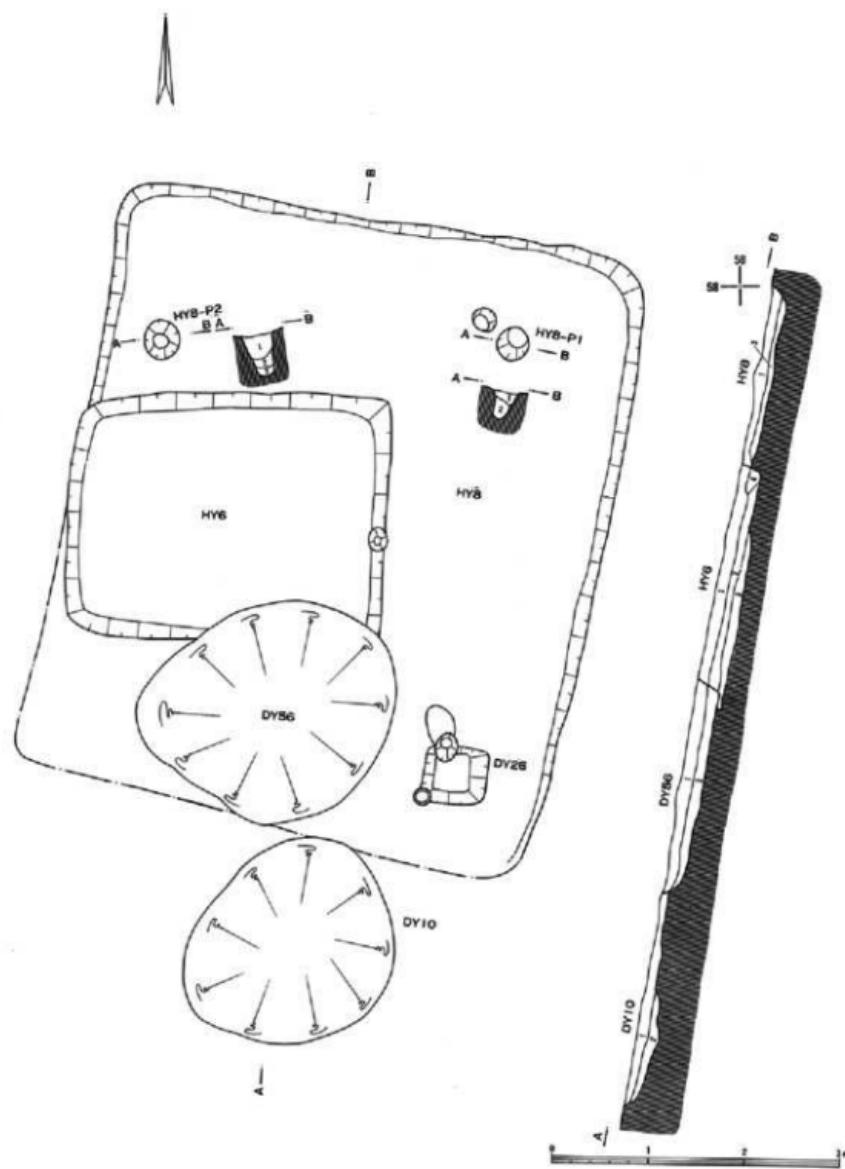
遺物—すべて破片で占められ、壺形土器口縁部片5点、壺形土器胴部片67点、壺形土器底部片1点、壺形土器口縁部片1点の総計74点であった。

H Y 55 (第4図 第三図版)

H Y 2 の床面直下より、検出された。

平面形状—ほぼ正方形をなし、長径5m 40cm、短径5m 34cmを測る。主軸方向はH Y 2 と同様である。

柱穴—H Y 55 P 1～H Y 55 P 4 まで、4本確認された。円形状を有し40cm～70cm、深さは28cm～55cmである。H Y 55 P 2 は梢円形状を呈すが、本来は円形の掘り方であったものが柱を抜きと



第5図 上新田A遺跡HY6・HY8平面図 (2)

る際に、梢円形状になったものと思われる。柱痕跡の間隔は平均で4m30cmを測る。

壁—HY2と同様な床面であるが、周構を有することから、壁が推測され、HY3と同様にゆるやかに立ち上がる壁と思われる。

床—前述したように、HY2と同じ床面を使用していたものと思われる。

炉跡—東方部の周構中央部に焼土が梢円形状にまとまって検出され、この箇所がHY55に伴うカマドと推定される。

周構—今回検出された竪穴住居跡の中で、HY55だけに確認された。全周する周構で幅は、東側で63cm、西側で89cm、北側で75cm、南側で55cmと幅広い形状である。このような周構をもつ住居跡として、昭和58年に発掘調査を実施した桑山遺跡群No3遺跡の例がある。この住居跡は南小泉式併行である。

遺物—北東部の周構コーナーより、壺形土器口縁部片が1点だけであった。

HY6(第5図)

この住居跡はHY8を切って構築され、南方部は近世の遺構である。DY55によって切られている。平面形状が長方形を呈す掘り方であり、長径3m32cm、短径2m75cmを計る。壁はほぼ直角に東側及び北側が立ち上がる。西側及び南側はゆるやかに立ち上がる。深さは平均で19cmを計る。柱穴は東側壁面に1本だけ確認されている。梢円形状で長径26cm、短径16cm、深さは30cmであった。遺物は総数24点認められ、内黒窯形土器底部片3点、壺形土器底部片1点、壺形土器胴部片20点となる。

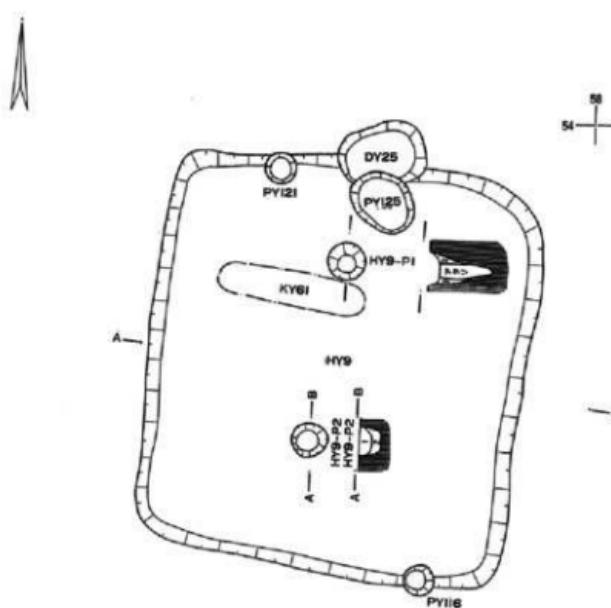
HY7(第7図、第三図版)

平面形状はほぼ正方形を呈し、長径3m85cm、短径3m40cmを計る。南方部の半分を奈良平安時代の土壤群によって切られている。

柱穴—PY120~123の4本が認められた。25cm~30cm、深さは15cm~20cmの円形に掘り込んでいる。PY122、123は北方部に位置する柱穴で、住居跡に伴う柱穴であるが、PY120と、121は土壤群が密集する南側に位置することから、住居跡に伴わない柱穴の可能性もある。

壁—床面よりゆるやかに立ち上がり、深さは床まで北側で25cm、南側で16cm、東側で12cm、西側で24cmである。南西部が浅いのは、土壤構築によって削平されたためであろう。床は平坦で固い。北方部だけが原形をとどめている。炉跡及び周構は確認されなかったが、南方部壁面に焼土がまとまって検出された箇所があり、この箇所にカマドを、構築していた可能性がある。

遺物—土壤群によって大部分が失われた状態であったが、第12図5の紡錘車1点をはじめ、壺形土器2点、壺形土器1点、高环1点、壺形土器口縁部片4点、壺形土器胴部片148点、壺形土器底部片1点、内黒窯形土器片9点、壺形土器片13点、高环脚部片1点、小形鉢形土器片1点が出土している。



第6図 上新田A遺跡HY9平面図 (3)

HY 8 (第5図)

HY 6 によって西方部を切られている。又後世の削平によって、南側壁が床面まで消失している。このような状況であり、全体の3分の2が、原形をとどめているにすぎない。

形状は長方形を呈し、ほぼ真北に近い主軸方向を有する。長径は6m40cmと推測される。短径5m50cmを測る。

柱穴—HY 8 P 1～HY 8 P 2の2本が確認されている。30～36cm、深さは25cm～45cmの円形状に掘られている。柱穴の間隔は3m85cmを測る。

壁—床面からゆるやかに立ち上がる。深さは原形をとどめている北方で20cm、他は前述した理由により削平された状況を呈する。

床—平坦で固く、粘度を貼付した痕跡が認められた。炉跡、周構は確認されなかった。

土壤—D Y 26は平面形状が方形を呈す掘り方で、1辺66cmを測り、深さは42cmである。このような土壤はHY 2でも認められ、構築された箇所が、南東コーナー部と同様である。HY 2の場合、付近にカマドを有することから、この2つの方形土壤は、水を貯水する目的で構築されたものと思われる。

遺物—壺形土器1点、内黒壺形土器1点、壺形口縁部片14点、壺形胴部片141点、壺形底部片8点、壺形土器片11点、高環脚部2点の総数178点が出土している。

HY 8、9 (第6図)

平面形状—方形を呈し、長径4m35cm、短径3m84cmを測る。主軸方向はほぼ真北を呈する。

柱穴—HY 9 P 1、HY 9 P 2の2本の他に、南北壁面に各1本ずつ計4本あるが、主柱穴としては前者のHY 9 P 1、HY 9 P 2である。35cmの円形を呈し、深さは23cm～55cmであった。柱穴の間隔は1m85cmを測る。HY 9 P 1に柱痕跡が認められた。

壁—HY 8と同様に、後世による削平によって、北西部が床面近くまで失われている。床面からの深さは北西部で6cm～9cm、東南部で20cmを有する。床面からゆるやかに立ち上がる。炉跡及び周構は確認されなかった。

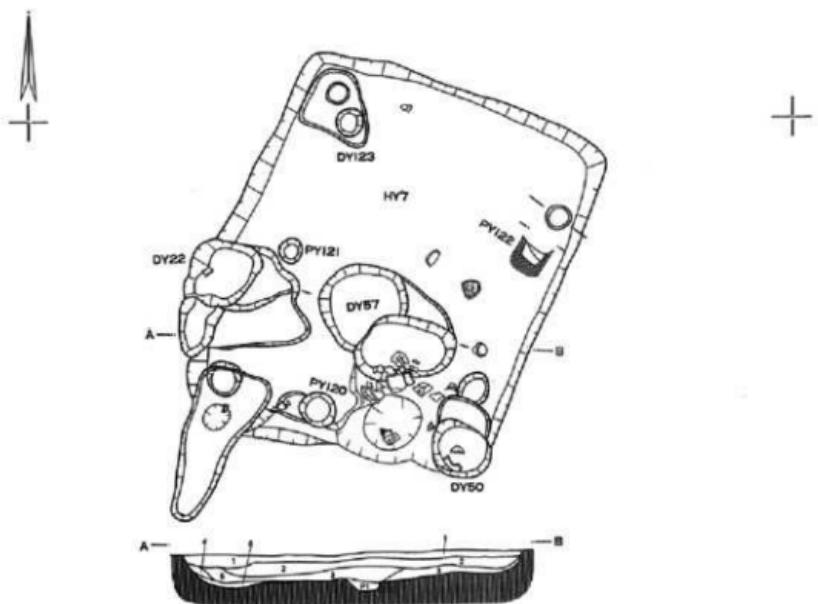
床—K Y 61は縄文時代の遺構であり、HY 9に伴うものではない。平坦で固くしまっている。

遺物—壺形土器1点、壺形土器胴部片24点、内黒壺形土器片3点、総数28点出土している。

溝状遺構 (K Y 20、59)

K Y 20は幅69cm、長さ2mを有し、深さは15cmであり、南北方向に延びている。K Y 59は東西方向に延びる溝で、長さ2m45cm、幅60cm、深さ13cmを測る。両方とも覆土に遺物を含まない。K Y 59は覆土に焼土を多量に含む。2基とも、住居跡の近くに存在することから、住居跡と関連する遺構と推測される。覆土は住居跡と同様であった。

ピット (P Y 28、37、40、42、43、76、79、80、82～102、104、106～108、111～114、116、



第7図 上新田A遺跡HY7平面図 (4)

120~122、125、128、133~135、137、139、144、149、152、154、159、162、163)

グリットの46~54、58~62と、グリットの54~58、66~70の2地点に集中して分布し、すべて平面形状が円形を呈する。20cm~30cmで深さは13cm~46cm、平均は約30cm位である。これらのピット群は掘立建物を構成するにはいたらなかった。P Y 69、76、77、87、88、90、93、94、98、107の10基のピットより遺物が出土している。P Y 69からは壺形土器胴部片4点、P Y 76からは壺形土器胴部片7点、P Y 77からは壺形土器胴部片10点、壺形土器底部片2点、P Y 87からは壺形口縁部片1点、壺形土器胴部片12点、壺形土器底部片4点、内黒窓形土器片1点、壺形土器片2点、楕円形土器口縁部片3点、P Y 88からは壺形土器底部片1点、P Y 90からは壺形土器胴部片1点、P Y 93からは壺形土器片1点、壺形土器片1点、P Y 94からは壺形土器口縁部片1点、壺形土器底部片3点、P Y 98からは壺形土器口縁部片1点、壺形土器胴部片6点、瓶片1点、須恵器片1点、P Y 107からは壺形土器胴部片7点、壺形土器片2点が、それぞれ検出されている。柱痕跡がP Y 95、107に認められた。覆土は自然堆積である。グリットの46~54、58~62に分布するピットの多くは焼土を含む。なお、竪穴住居跡に伴うピット群は割愛してある。

土壤(4、5、11、12、14~18、21、23~27、29、30、32、35、36、39、52、58、62、70、74、75、81、109、115、117、119、123、126、127、129~131、136、141~143、147、148、150、156、157、160、161、164~166)

平面形状が円形状、梢円形状を呈す形態であり、深さは平均30cm位である。ポール状や、竪穴状に掘りこんでいる。上端で平均70cm~80cmを計るものが多い。形態別に分けて説明したい。

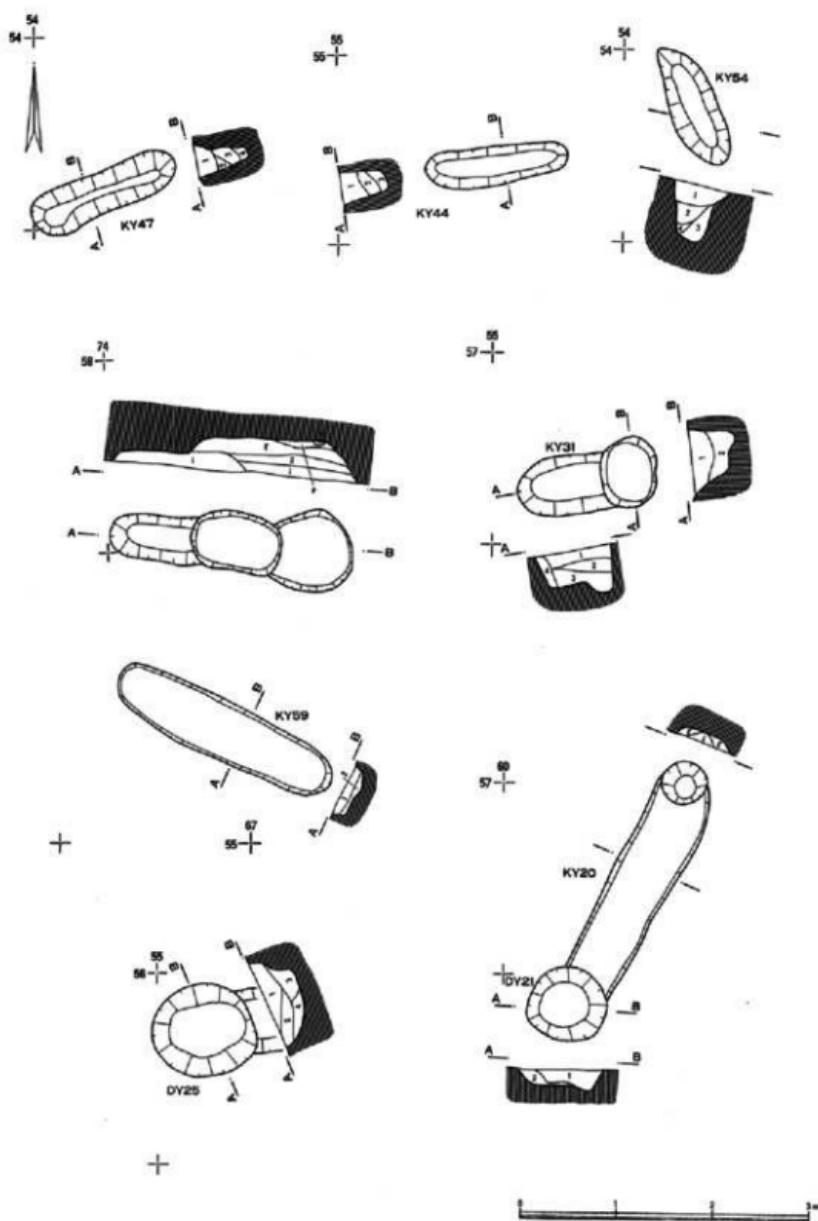
1 D Y 11、17、23、62、119、166

6基の土壤群は、底面に土器を埋納した状況を呈する。D Y 17は、溝状の形状を呈すが、前述した形態からこのグループに加えた。D Y 11、62、119、166は南北方向に同様な間隔で、構築されている。最も南端にあるD Y 119はH Y 9の東方5m30cmの地点に位置し、底面から完形の壺形土器が出土している。この壺形土器は底面中央部に設した状況であった。D Y 166はH Y 7とH Y 8の中間点に位置し、浅く掘りこまれた梢円形状を呈している。内部から壺形土器1個体分がまとまって出土している。この箇所は後世の削平を受けた場所であり、本来は壺形土器を立てた状態で埋納した土壤と推定される。D Y 62は方形の竪穴状に掘られた土壤で、H Y 7の西方部2m30cmの地点に位置する。内部からは壺形土器1点、壺形土器2個体分が出土している。

D Y 17はH Y 2、8の中間地点西方に位置し、内部からは高環2点、壺形土器1点が出土している。

D Y 23はH Y 3の北方4m50cmの地点に位置し、内黒窓形土器3点、壺形土器1点が出土している。

これらの土壤群は、祭祀的な色合いの濃い様相を呈すもので、本遺跡の竪穴住居跡群が、何ら



第8図 上新田A遺跡土壙平面図 (1)

かの形で、集落全体としての祭祀を行っていた痕跡を示す土壙と言えよう。

2. D Y 32, 35, 36, 52, 115

これらの土壙群は H Y 7 の南西部に位置し、覆土に多量の焼土を含むのが特徴である。精査する前もこの土壙群が位置する一帯は、焼土に覆われていた。掘り下げ前は竪穴住居跡と推測していたが、掘り下げるに従って、土壙群の密集する一帯であることが判明した。

3. D Y 4, 5, 14~16, 18, 21, 25~27, 30, 58, 70, 74, 75, 109, 123, 126, 127, 129, 130, 131, 136, 141, 143, 147, 148, 150, 157)

これらの土壙群は住居跡群の周囲を中心として点在し、ポール状の底面形状を有する。深さも 10cm~20cm と浅いのが特徴である。遺物を含まない土壙が大半である。

4. D Y 118, 147

D Y 118 は、調査苦の南端に位置し、大形の形状を呈す。覆土に遺物を若干含む。D Y 147 も大形で深い。遺物は変形土器胴部片 54 点が出土している。

○ 奈良・平安時代の遺構 (D Y 22, 50, 57)

土壙 3 基がある。H Y 7 を切って構築されたものである。この土壙について説明を加える。

D Y 22, 50, 57 からは須恵器坏 3 点、刀子 1 点、が出土している。他に H Y 7 の遺物が混入した状況を呈していた。今回の調査区からは、この土壙群以外に、奈良・平安時代に位置する遺構は検出されなかった。調査区東側に位置する台地が、奈良・平安期の中心と推測される。

○ 近世の遺構

溝状遺構 3 基、ピット 8 基、土壙 3 基であった。これらの遺構について、以下に述べる。

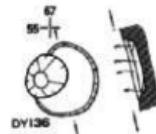
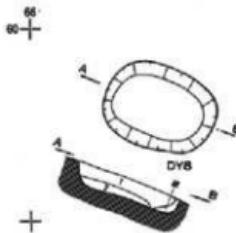
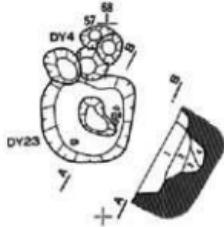
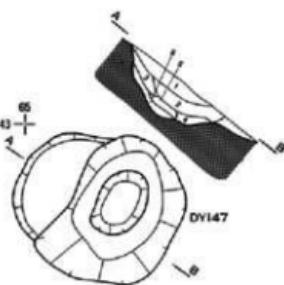
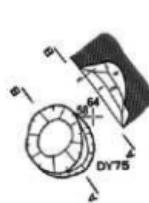
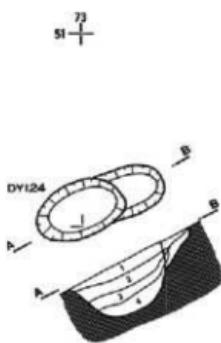
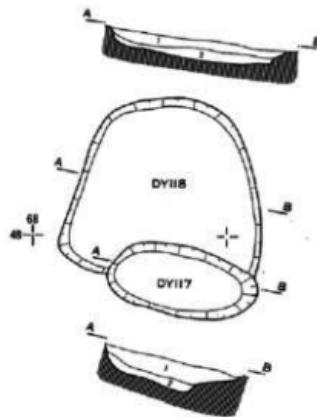
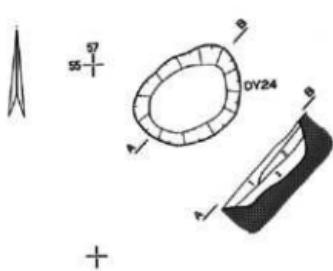
溝状遺構は、K Y 13, 38, 138 となる。これらは浅く遺物も含まれていない。覆土から推測して近世の遺構と判断した。ピット群は P Y 64~69, 77, 78 であり、グリットの 54~58, 54~58 に集中して分布する。30cm~50cm で、深さは 20cm~30cm である。掘立柱建物跡を構成するピット群であろう。土壙は、D Y 10, 19, 56 がある。D Y 19 は方形状に掘りこまれた土壙で、深さは 15cm を測る。覆土から陶磁器の小皿が出土している。

今回の調査区は現在畠となっているが、それ以前に民家があったと言うことから、これらの遺跡群は、その時期に伴う遺構群である。

○ 自然 遺構

遺跡全体図で示した、T 1~T 5 の掘り下げ結果から以下のことが判明した。

第 1 に、全体図の中で示した破線の箇所が、大形の自然溝状遺構であり、今回の調査では、その北端部を発掘したことになる。溝の深さは、約 2m あり南方に広がるものと思われる。又底面近くからは完形土器を含む多量の遺物が出土している。他に流木や植物の種子も認められた。この事により、本遺跡の重要性が増大した。



第9図 上新田A遺跡土壤平面図 (2)

(表1)

上新田A遺跡観察表

(単位:cm)

時代	遺構番号	形 状	深さ	長径	短径	出土地区	備 考
古 墳 時 代 の 土 壌 群	D Y 4	楕円形	24	37	24	G 70-58	變形土器片24点、焼形土器片9点
	D Y 5	円 形	36	50	45	G 54-66	變形土器片12点
	D Y 11	楕円形	33	140	92	G 46-66	小形鉢形土器1点、變形土器片52点、焼形土器片6点
	D Y 12	楕円形	5	90	(50)	G 54-62	變形土器片4点
	D Y 14	楕円形	9	(97)	52	G 66-62	
	D Y 15	楕円形	20	215	171	G 54-54	變形土器片16点、焼形土器片19点
	D Y 16	円 形	15	90	85	G 54-58	變形土器片16点、焼形土器片3点
	D Y 17	楕円形	23	242	78	G 62-62	
	D Y 18	円 形	26	53	(49)	G 62-62	變形土器片6点、焼形土器片1点
	D Y 21	円 形	18	82	80	G 58-62	
	D Y 23	楕円形	?	93	92	G 70-58	變形土器片11点、焼形土器片4点
	D Y 24	楕円形	24	120	90	G 62-58	
	D Y 25	方 形	?	90	85	G 54-62	
	D Y 26	方 形	42	65	61	G 58-58	
	D Y 27	円 形	35	43	42	G 54-58	變形土器片8点、焼形土器片4点、繩文土器片1点
	D Y 29	不整形	5	130	110	G 58-58	
	D Y 30	楕円形	46	95	69	G 58-58	變形土器片7点、焼形土器片2点
	D Y 32	円 形	35	108	98	G 58-58	
	D Y 35	楕円形	27	87	62	G 58-58	
	D Y 36	円 形	35	100	94	G 54-58	變形土器片20点
	D Y 39	円 形	23	53	53	G 58-58	
	D Y 52	楕円形	8	93	(84)	G 54-58	
	D Y 58	円 形	45	50	45	G 66-54	變形土器片1点、高坏片1点
	D Y 62	方 形	33	80	65	G 58-62	焼形土器1点
	D Y 70	円 形	?	60	60	G 58-62	
	D Y 74	楕円形	?	?	?	G 58-58	
	D Y 75	円 形	29	79	69	G 61-66	
	D Y 81	楕円形	36	120	88	G 66-62	
	D Y 109	方 形	36	52	48	G 58-62	

表2

(単位……cm)

時代	遺構番号	形 状	深さ	長径	短径	出土地区	備 考
古 墳 時 代 の 土 壙 群	D Y 115	円 形	15	73	63	G 58-58	
	D Y 117	長円形	30	153	78	G 54-70	變形土器片 1 点
	D Y 118	方 形	15	204	198	G 54-70	
	D Y 119	円 形	35	65	65	G 54-58	變形土器片 15 点、橢形土器片 2 点
	D Y 123	橢円形	13	90	75	G 54-58	
	D Y 126	長円形	15	84	58	G 62-58	
	D Y 127	円 形	8	102	(65)	G 62-58	
	D Y 129	橢円形	11	65	(58)	G 58-58	
	D Y 130	円 形	5	68	68	G 58-58	
	D Y 131	橢円形	18	153	125	G 58-58	
	D Y 136	円 形	17	75	34	G 66-58	
	D Y 141	橢円形	22	75	60	G 58-74	變形土器片 8 点
	D Y 142	円 形	18	75	70	G 58-74	
	D Y 143	円 形	7	83	(33)		
	D Y 147	橢円形	42	172	165	G 46-66	
奈 良 ・ 平 安	D Y 148	方 形	33	88	80	G 54-54	橢形土器 1 点、變形土器片 2 点、變形土器片 2 点
	D Y 150	橢円形	5	166	90	G 62-62	
	D Y 156	橢円形	18	85	(78)	G 58-74	
	D Y 157	橢円形	14	97	60	G 58-74	
	D Y 160	橢円形	39	100	57	G 54-74	
	D Y 161	橢円形	13	52	(42)	G 54-74	
近 世	D Y 164	長円形	8	130	98	G 58-58	
	D Y 165	橢円形	15	108	84	G 66-62	
	D Y 166	不整円形	20	110	86	G 58-58	變形土器 1 個体分
奈 良 ・ 平 安	D Y 22	不整円形	35	72	60	G 58-54	刀子 1 点
	D Y 50	橢円形	35	68	60	G 58-54	須恵器环 1 点
	D Y 57	円 形	20	(90)	63	G 54-58	
近 世	D Y 10	橢円形	24	233	200	G 58-58	變形土器片 10 点、环形土器片 3 点
	D Y 19	方 形	15	155	130	G 54-54	變形土器片 2 点
	D Y 56	橢円形	24	267	234	G 58-58	

4. 検出された遺物

今回の調査区からは、総数4,370点の遺物が出土している。出土状況別に大別すると、遺構出土及び遺構外出土に分けられる。前者は竪穴住居跡や土壙を中心とし、3,540点、後者は830点であった。遺構別では竪穴住居跡が最も多く、3,063点、土壙、ピット群が477点となる。

これらの遺物は古墳時代後期（栗廻式）に併行する土師器類が大半であり、他に縄文土器片や石器類、陶磁器類が少量認められた。これらの遺物は調査対象となった台地からの出土遺物であり、T 1～T 5のトレンチによって確認された。大形の自然溝状遺構出土の遺物は含まれていないのを加えておきたい。これらの遺物については後日、報告する用意がある。

出土した遺物については、すべて実測図を作成していないので図版によって示す。前述した遺物とまとめて、後日発表したい。以下年代別に分けて述べたい。

○ 縄文時代の遺物（第10図1～4、第12図1～4、第七図版）

土器片、石器に大別され、土器片14点、石器18点が認められた。土器片は磨滅が著しく、拓本可能な土器片は4点にすぎない。第10図に1～4に示したのが、これらの土器片であり、深鉢形土器の口縁部片が同図1、3、胴部片2、4である。3は口縁部に無文帯を有する大木9b式併行の破片と想定される。1、2とも胎土から3と同様な年代であろう。4は胎土の観察から縄文後期に位置づけたい。他に縄文前期の土器片が6点出土している。

石器は完成石器と剣片に分けられ、前者は4点、後者は14点出土している。石材は頁岩が多く使用されている。図示した完成石器について述べる。

第12図1はチャートを素材として、b面に1次剥離面を有する有茎石鏃である。基部と縁辺が後世の欠損を受けている。形態から縄文後期の石鏃と言える。

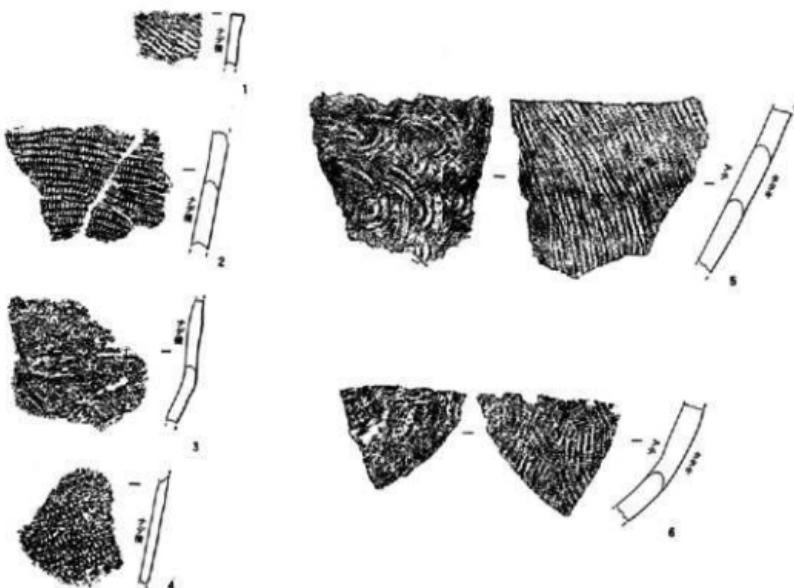
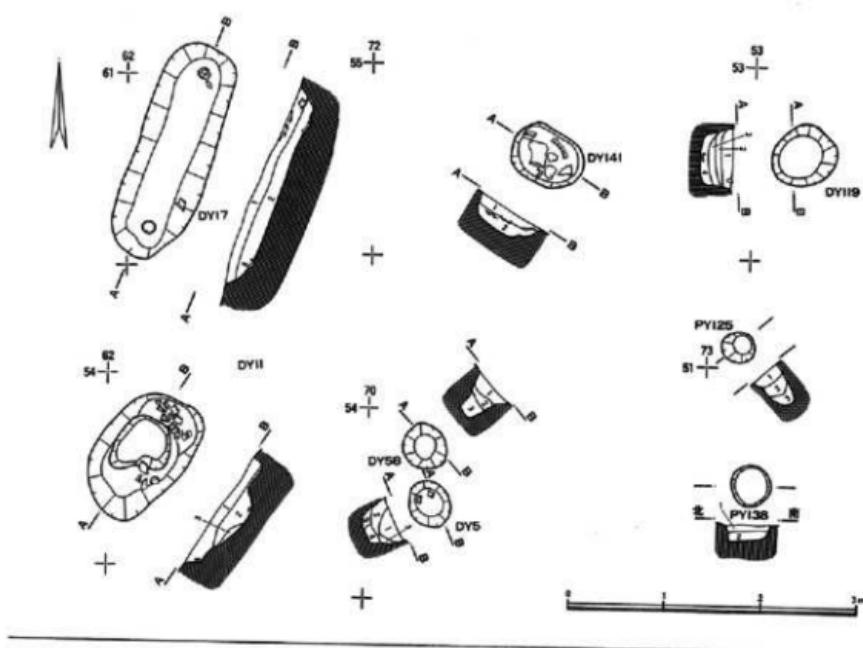
同図2は両面調整によって棒状に整形された小形の石錐である。両面に一次剥離面を残す。同図3は欠損面を有する。綫型の石匙で縄文前期の所産である。同図4は片面調整により、尖状を呈す形状に整形された石範状石器で、刀部に使用による剥離面がC面に観察される。形態から判断して、縄文早期から前期に多く見られる形態であるが、今回の調査区からは縄文早期の土器片は出土しておらず、前期の所産と見るべきであろう。

○ 古墳時代後期の遺物（第11図1～3、第四図版～第七図版）

土師器類、土製品、石製品、砥石があり、完形、一括土器は44点であった。土師器類は器形から塊形土器、壺形土器、甌、鉢形土器、小形鉢形土器、高坏の6器種に分けられる。

塊形土器 [a¹～a⁴類] 21点、壺形土器 [b¹～b²類] 13点、甌 [c¹～c²] 3点、鉢形土器 [d類] 3点、小形鉢形土器 [e¹～e²] 5点、高坏 [f類]、以下に各土師器類の説明を加える。
a類 [塊形土器]

H Y 2を中心に復元可能な土器21点を始め、a類土器の破片は378点出土している。これらの



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10mm

第10図 上新田A遺跡土器平面図、土器、須恵器拓影図 (3)

破片の吟味から本類は約100点にのぼると推測される。a¹～a⁴類に分けられる。

a¹類土器 [第11図2、第六図版1,5]

底部が丸底を有し、口縁部がいくらか外に曲する。ヘルメットを逆にした様な形態に近い。外面調整は横位、縦位、斜位によるヘラミガキを最後の調整として施文するものが多い。内面調整もナデ、ヘラミガキを中心に施す。a¹類～a⁴類の調整は同様なものが大半である。本類は出土数が最も少ない器形である。HY2の土壤から完形の第11図2が検出されている。

a²類土器 [第六図版2]

器高が低く、口縁部がわずかに内曲する形態である。内黒を有するものも認められた。器高は平均で4.5cmを計る。口径は13.5cmが平均である。出土類としてはa¹類に次いで少ない。

a³類土器 [第11図3、第六図版3,4]

器形は口縁部が直立し、外面の胴中央部に稜を有するのが特徴である。図示した第11図3はDY119の底面より検出された。出土数が最も多い器形で、内面を黒炭化処理した土器は出土数の約半分を占める。内黒は一般的に薄手に整形されているものが多く認められた。図示した土師器塊が平均的な形状で、これより小形を呈す器形も少量出土している。

a⁴類土器 [第六図版6]

前述したa³類と同様に外面の胴部に棱を有し、口縁部が外反する器形である。内面を黒炭化処理した内黒が多く、壺形土器としては大形の器形を呈すのが多い。HY2、HY8、DY148より出土している。出土数はa³類より少ない。

b類土器 [壺形土器]

各住居跡より認められるが、復元できたのは5点であった。器形からb¹～b³の3形態に分類する。

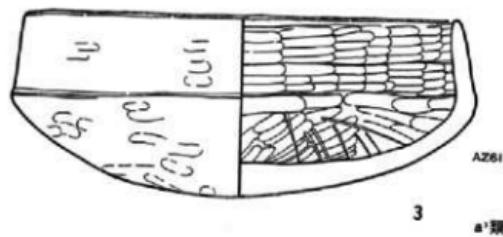
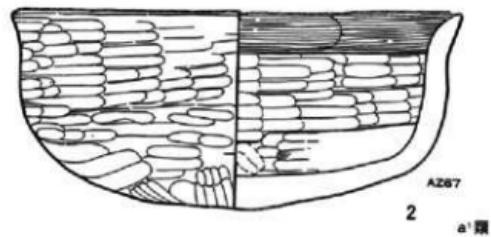
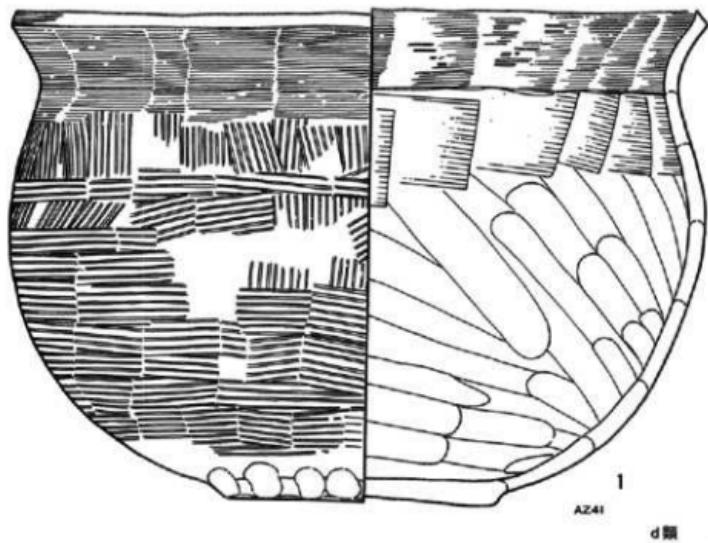
b¹類土器 [第四図版1,2]

全体的な形状が細長い卵状を有するもので、勁部から口縁部にかけてほぼ直角に外反し、口唇部が「く」字状を呈する壺形土器である。調整は外面を縦位、斜位のハケメをおこない、最後に勁部から口縁部を横位のナデで仕上げてある。底部付近にも縦位のナデを施している。内面調整もハケメを施し、口縁部は横位のナデ、胴部は、横位、斜位のヘラナデ、底部は斜位、横位のハケメで仕上げている。HY2の西方コーナー部より、2点の完形土器が出土している。

b²類土器 [第四図版4]

口縁部が直立し、口径より胴部径が上回る、細長い卵状を呈す器形である。外面はハケメによる調整を施した後に、縦位、斜位のヘラミガキによって丹念に仕上げられている。内面も同様であり、口縁部だけは横位のナデを施す。壺形土器に分類したが、壺形土器に近い器形である。

b³類土器 [第四図版3,5]



第11図 上新田A遺跡出土土器実測図

口縁部が大きく外反し、胴部が直角に近く垂下するのを本類とした。HY2を中心に6個体分出土している。調整は内外面の口縁部を除く箇所は、縱位、斜位、横位のハケメによって仕上げられ、口径は20cmを計る。器高は復元した土器が底部欠損であるため不明であるが、推定で約30cmを有するものと考えられる。

c類土器【瓶】

HY2から3点認められた。浅鉢形状を示す器形と深鉢形状の両者がある。第12図版1は深鉢形状を呈す器形である。

c¹類【第五図版1】

底部に8.5cmの円孔を伴っている。外面調整は幅のせまいハケメを縱位に施し、口縁部はナデ及びヘラナデによって仕上げられている。内面調整はハケメを用い、ナデによって仕上げられている。焼成は良く、器面は二次焼成を受けた痕跡を有する。

c²類

底部が細い棒状工具による円孔であり、浅鉢形を呈す。後日、報告する大形溝状跡より出土しており、完形である。

d類【鉢形土器】(第11図1、第五図版2,3)

HY2より3点、DY141より1点出土している。外面調整は縱位、斜位、横位のハケメを施し、口縁部はナデによって仕上げられている。内面はヘラナデ、ヘラミガキ、ナデによって調整されている。

e類土器【小形鉢形土器】

住居跡を中心に5点出土している。これらは器形からe¹～e²類の2形態に分けられる。

e¹類【第五図版4～6】

口縁部が直立する形状で臺形に近い形状を呈する。内外面ともハケメ、ナデの調整を施す。

e²類【第四図版6、第五図版7】

口縁部が外反する形状である。調整はe¹類と同様である。

f類土器【高坏】(第六図版7～12)

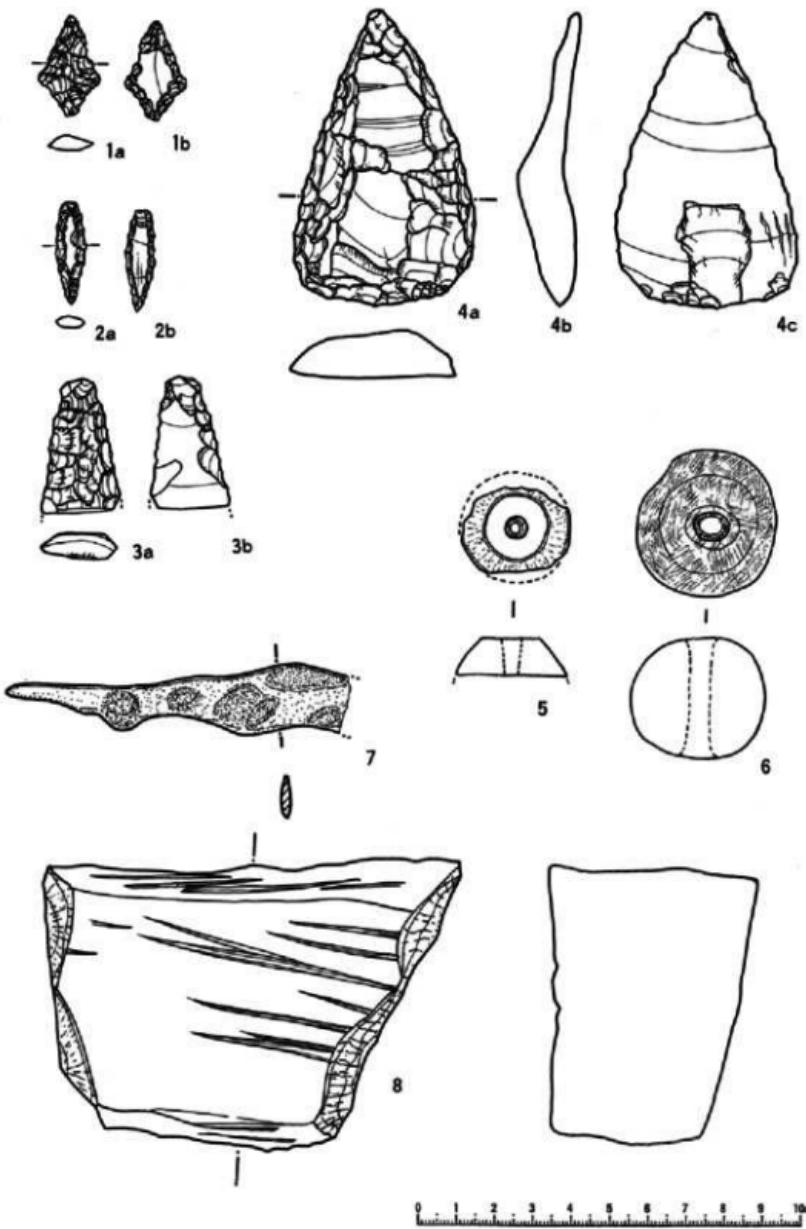
高坏は脚部片で占められ、13点出土している。頸部から垂下して、ゆるやかに脚が広がる形状である。外面を縱のハケメ、横のナデを施し、最後にヘラミガキで整形したものが多い。内面は指のナデからハケメ、最後に横位、斜位のナデで仕上げられている。

○土製品【第12図6、第七図版8】

HY2の床面から出土した土玉である。中央に円孔があり、貫通している。

○奈良・平安時代の遺物【第10図5,6、第七図版13～15】

須恵器坏2点、赤焼土器1点、須恵器臺形土器片2点、刀子1点が認められた。



第12図 上新田A遺跡出土石器、石製品、土製品、刀子実測図

5. まとめ

今回の調査は、当初の予想を上回る成果を上げ終了した。この紙面では中心年代である古墳時代後期に位置する遺物、遺構群について述べ、まとめとしたい。

竪穴住居跡群は7棟確認された。重複関係から吟味すると3時期に亘って存続した集落と言えそうである。1時期30年とすれば約100年間の年代幅が想定される。Ⅰ期はHY55、HY9の2棟、Ⅱ期はHY3、HY8の2棟、Ⅲ期はHY2、7、9の3棟となり、2棟から3棟で構成された集落である。

この年代は東方に位置する、戸塚山山麓に盛んに横穴石室を有する古墳が造営された時期で、当市において始めて確認された、古墳時代後期の集落跡であった。

米沢市は昭和40年代後半から発掘調査を実施しており、現在までに古墳時代前期、中期、終末期の集落跡を確認している。今回の発掘によって、古墳時代の集落が、たえまなく存続していたことが、裏付けられた。

遺物の面でも米沢盆地における、古墳時代土器編年が確立され、今後の古墳時代における研究に新たな1頁を加え、さらに古墳と集落の係わりについても注目される遺跡である。その理由は南方より確認された、大形溝状遺構からの出土遺物にある。

この遺構は西より東方に延び、北方縁辺部を発掘したにすぎないが、T1と示した場所からは100点の完形土器を含む多量の遺物が検出された。器形は、高坏、壺形土器、埴、瓶、碗形土器などがある。

溝状遺構は湿地帯であった様相を呈しており、遺物は集落が位置す、北方より投げ入れられたものであろう。湿地でやわらかい土質がさいわいして、完形で残っていたものと考えられる。底面は湧水があり、木器などが出土する可能性も高い。

古墳、集落、遺物を総合して考えた場合、本遺跡の集落は祭祀を目的とした集団と言えそうである。高坏に例をあげると、住居跡より出土した高坏と、溝から出土した高坏とでは、調整の点で相異が認められる。溝の高坏は整形が雑であり、1回の使用に堪えればよい、すなわち使い捨ての感じである。

古墳に埋葬する前後に本遺跡において、何らかの儀式がおこなわれた事を、多量の遺物は示している。集落はこれらの儀式の廃絶に伴い、その役目を終わり、移転したものであろう。

戸塚山古墳群についても、まだ解明されていない部分が多く、今後の課題である。ゆえに古墳群をとりまく遺跡群も、米沢盆地において、古墳時代の資料が数多く埋蔵されている地域にあると言えよう。両者を含めた調査が望まれる。

最後に今回の発掘調査に御協力いただいた地主の手塚氏をはじめ、上郷地区史跡保存会、上郷公民館に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 手塚 孝・菊地政信 (1981) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第6集 米沢市万世町桑山団地造成地内、埋蔵文化財調査報告書第1集 水神前遺跡・柿の木遺跡・二夕俣B遺跡
米沢市教育委員会
- 手塚 孝 (1982) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集 笹原遺跡 米沢市都市計画課
まんぎり会 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1983) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集 米沢市万世町桑山団地造成地内、埋蔵文化財調査報告書第II集 二夕俣A遺跡・八幡堂遺跡
米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1984) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第10集 戸塚山古墳群詳細分布調査報告書 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1985) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第14集 上浅川遺跡 1次・2次調査報告書 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信・村山正市 (1986) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第15集 上浅川遺跡 第3次発掘調査報告書 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1986) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第17集 米沢市万世町桑山団地造成地内 埋蔵文化財調査報告書第III集 大清水遺跡 米沢市教育委員会
- 手塚 孝・菊地政信 (1987) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第18集 大浦遺跡 大浦A遺跡・大浦C遺跡発掘調査報告書 米沢市教育委員会
- 手塚 孝 (1988) 米沢市埋蔵文化財調査報告書第21集 比丘尼平遺跡 発掘調査報告書
米沢市教育委員会

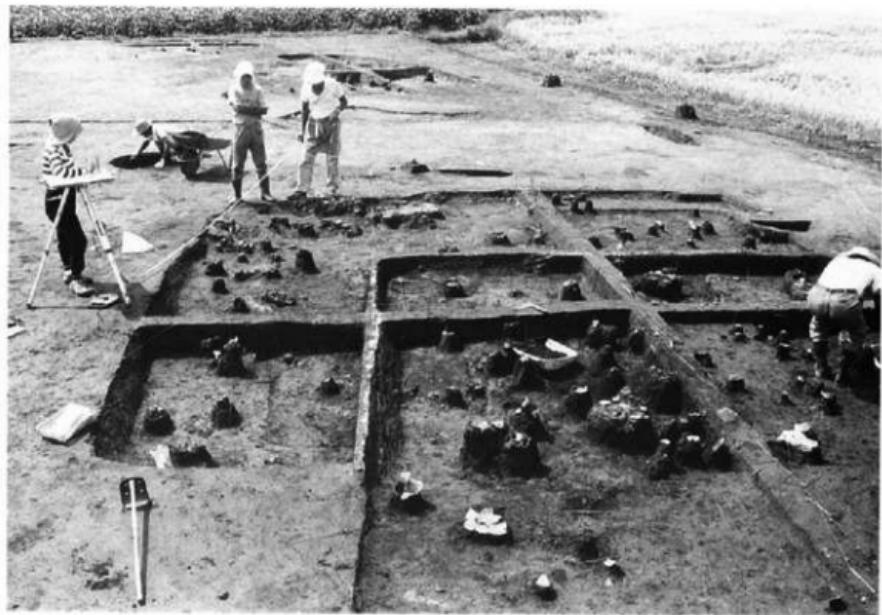
写 真 図 版



▲ 調査区全景（上空より撮影）



▲ 発掘風景（北東より望む）



▲ HY2、3遺物出土状況（東方より望む）



▲ 住居跡プラン確認状況（北東より望む）



▲ KYI掘り下げ状況（南方より望む）



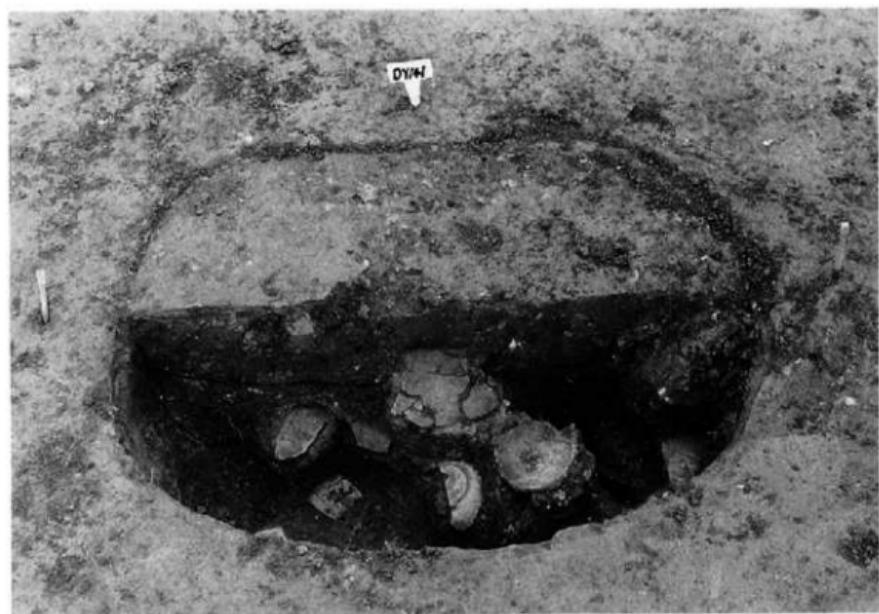
▲ HY7の土壤遺物出土状況（南方より望む）



▲ HY7セクション状況（南東より望む）



▲ DY119遺物出土状況



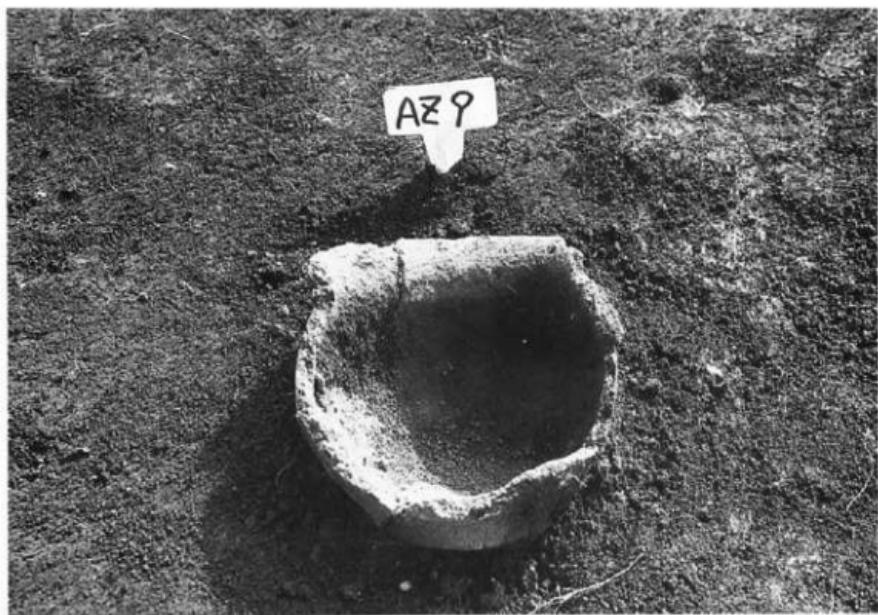
▲ DY141遺物出土状況



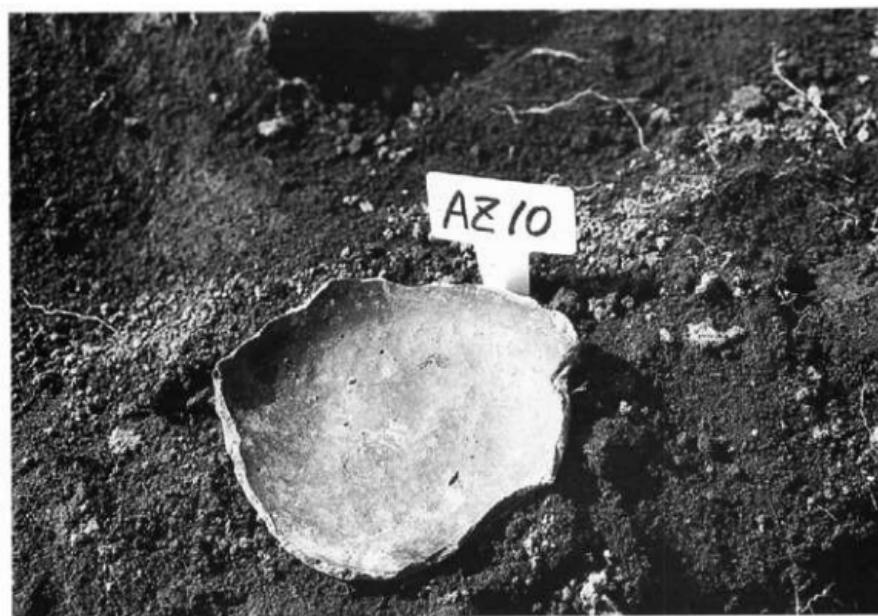
▲ HY2 カマド付近遺物出土状況（東方より望む）



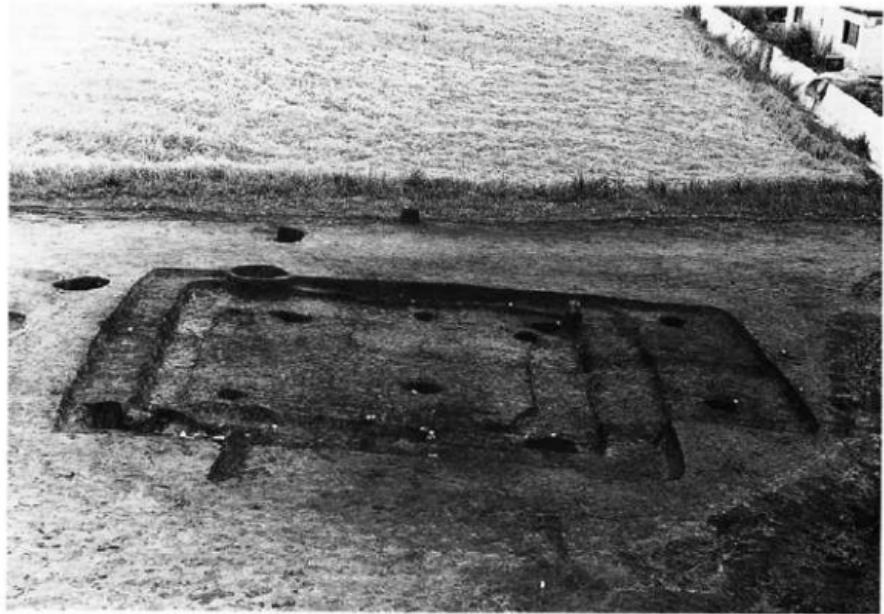
▲ HY2 西壁遺物出土状況



▲ 遺物出土状況



▲ 遺物出土状況



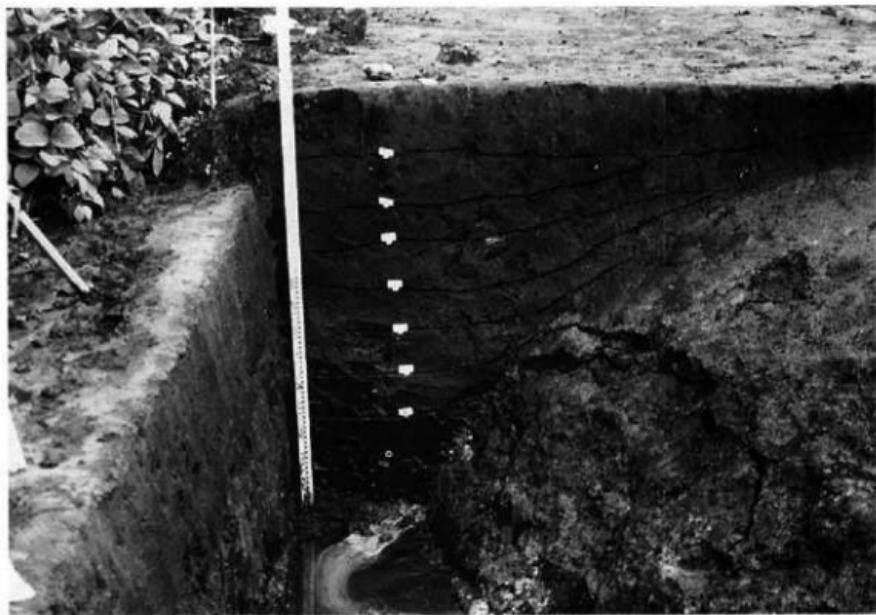
▲ HY2、3、55 完掘状況（南方より望む）



▲ HY7 完掘状況（南東より望む）



▲ T-1 全景 (北方より望む)



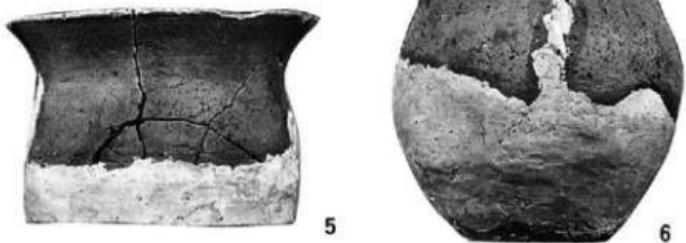
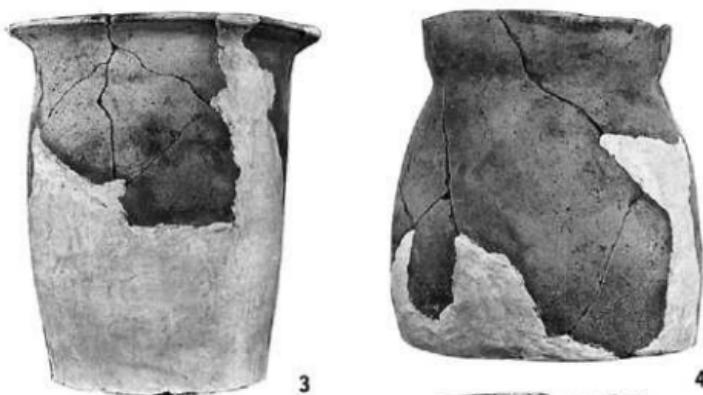
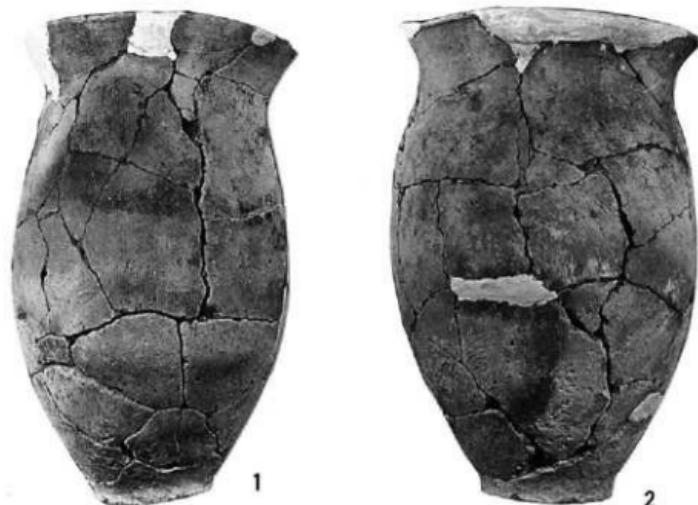
▲ T-1 セクション状況 (東方より望む)



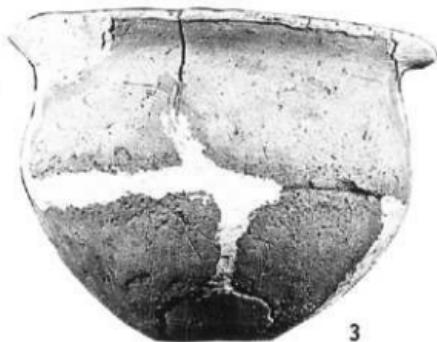
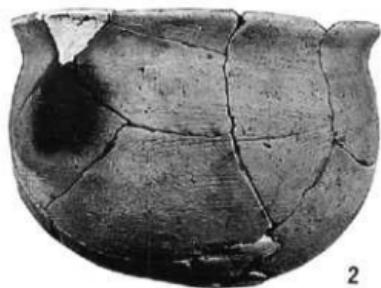
▲ T-1 遺物出土状況



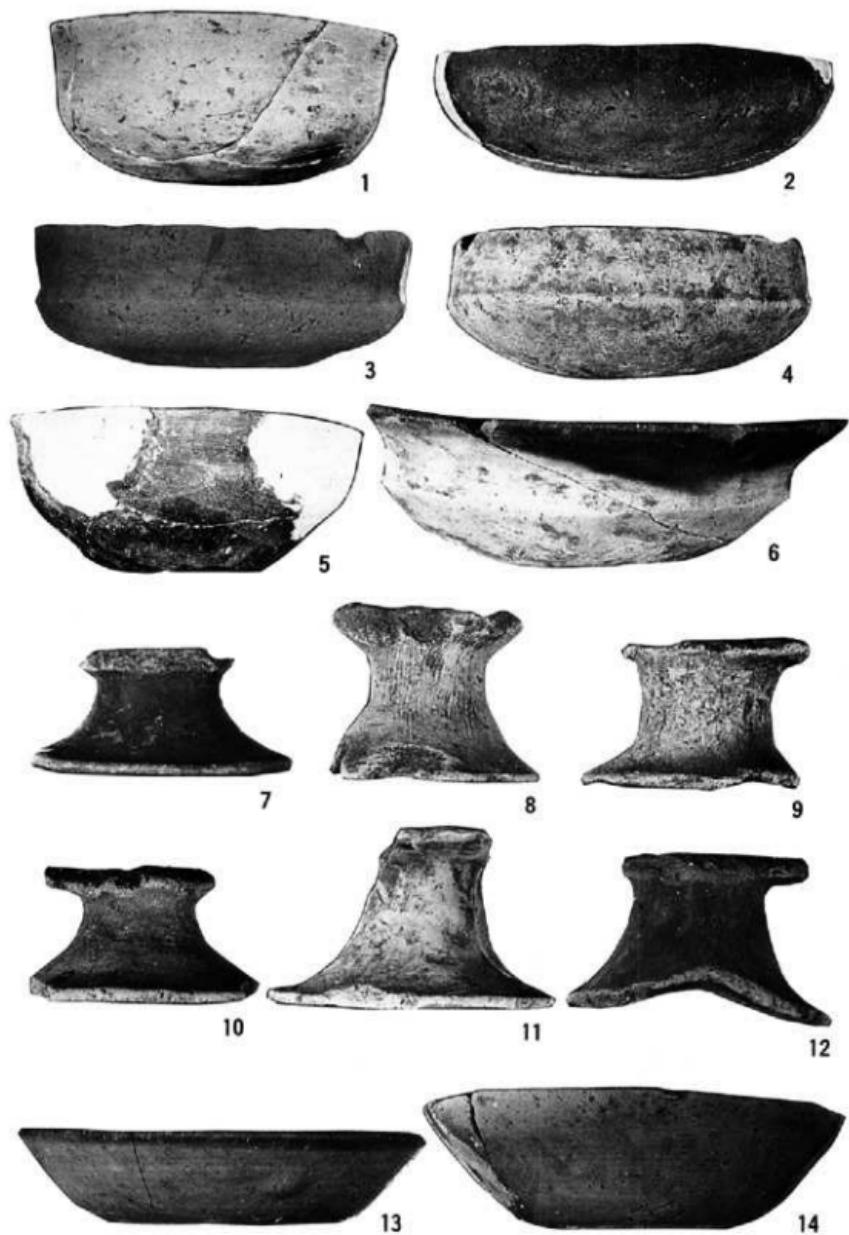
▲ T-1 遺物出土状況（近景）



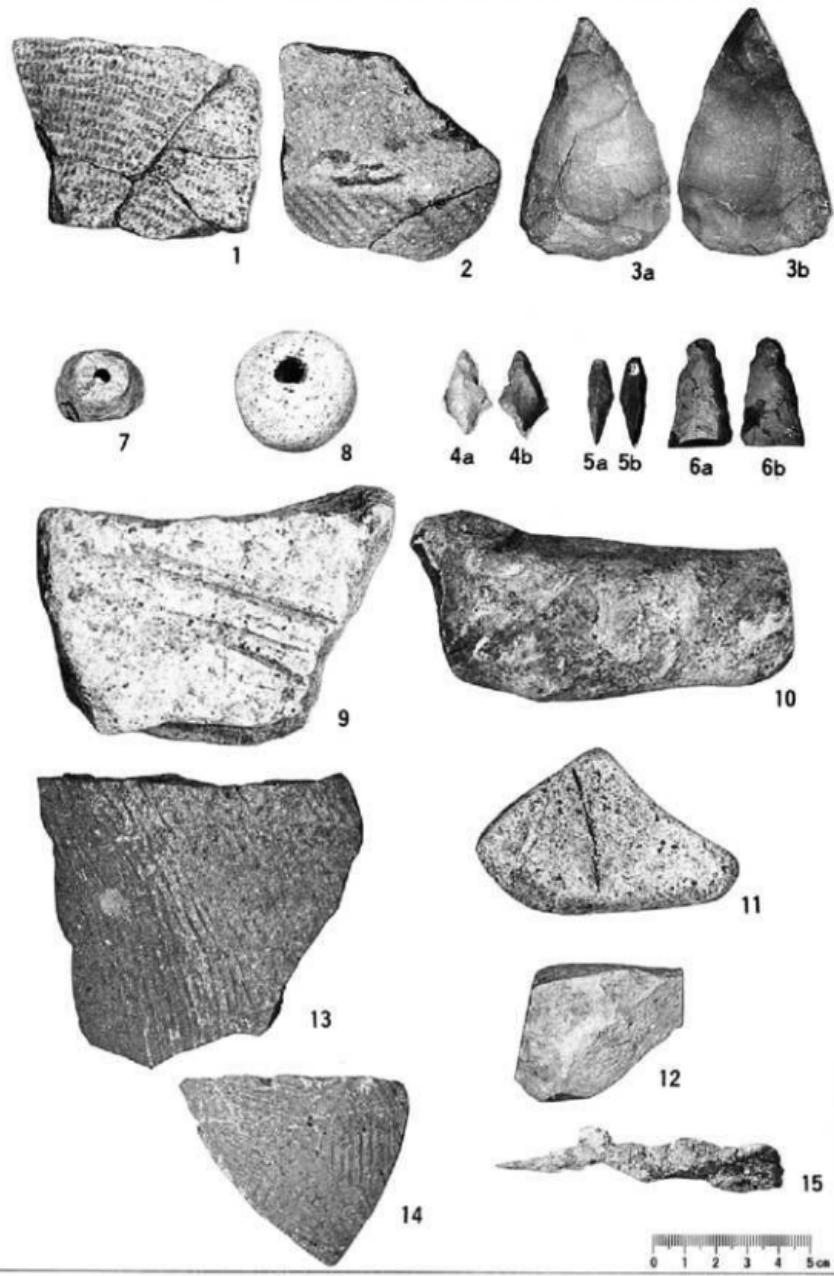
b²類1、2 b¹類1、2 b²類4 b³類3、5 e²類6



c¹類1 d類2、3 e¹類4～6 e²類7



a¹類 1, 5 a²類 2 a³類 3, 4 a⁴類 6 f類 7~12 須恵器 13 赤焼土器 14



縄文時代の遺物 1～6、古墳時代後期の遺物 7～12、奈良平安時代の遺物 13～15

米沢市埋蔵文化財調査報告書第34集

上新田A

上新田A遺跡発掘調査報告書 第1集

平成4年3月25日印刷

平成4年3月30日発行

発行 米沢市教育委員会

米沢市金池五丁目2-25

TEL(0238)22-5111(内線727・728)

印刷 株式会社よねざわ印刷

米沢市城西二丁目3-72

TEL(0238)21-1212

